

## 平成 29 年度 第 2 回北関東救急看護研究会

### 発表概要

テーマ： ICU から一般病棟へ転棟する呼吸器装着患者に関するコンサルテーション

話題提供者

所属：横浜市立大学附属市民総合医療センター

氏名：辻本真由美

今後の超高齢化社会において、在院日数の短縮が迫られる状況と相まって、人工呼吸器装着のまま療養場所の変更を迫られる症例が増加すると予測される。人工呼吸器ケアを提供する機会の少ない一般病棟において、患者の不利益を避けケアの質を維持することが求められるが、そこには様々な課題がある。今回、急な病状悪化により低酸素脳症を呈し、家族が治療減量の代理意思決定を行い、人工呼吸器装着のまま一般病棟へ転棟した事例におけるコンサルテーションについて検討した。

事例では、転棟先病棟のスタッフより、挿管下人工呼吸器装着患者の口腔ケア方法を知りたいというニーズがあり、一般病棟スタッフをコンサルティとしたコンサルティ中心のケースコンサルテーションとして、また課題適応型のコンサルテーションと捉え介入を行った。CNS は病棟スタッフの人工呼吸ケアへの不安が軽減することで、よりよいエンドオブライフケアが提供されることをゴールと考え、病棟スタッフと共に口腔ケアや体位ドレナージを実施した。結果として、人工呼吸器に関連するトラブルなく経過し、患者の安楽は維持された。また、患者家族は病棟スタッフとこれまでの経過や生活史を振り返り、「治療減量の代理意思決定をしたことは間違っていなかった」と受け止められるようになり、患者の最期を看取ることができた。

一方で、この事例は手を尽くしても回復は見込めないケースであったが、ケアが足りないから状態が改善しないのではないかという懸念が病棟スタッフから感じられることがあった。顕在化するコンサルティのニーズと、コンサルタントの考えるゴール設定に解離が生じないように、コンサルティの満足感や自信を支えながら、患者や家族にとって望ましいゴールを共有することの重要性を再確認した。

また、病棟所属の CNS が組織横断的にコンサルテーションを実施する上での課題として、時間確保、所属部署上司との連携、起動力、チームビルディング、自部署以外の組織の把握などが挙げられ、CNS 自身の役割と能力（得意なこと）の可視化、周知が重要であることが話し合われた。

また今後、人工呼吸器離脱や気管切開カニューレの抜去などの判断時期が急性期領域以外の療養場所に転院後となる可能性が高いと考えられる。急性期領域以外の療養場所でも、患者にとって最善のアウトカムを出せるような人工呼吸ケアを提供するために、CNS がどのように関わられるかということも今後の課題である。